



私が見た 図書館

日本語学科 4年次生
齊藤 真希子

新入生のみなさんご入学おめでとうございます。大学生活という新しい生活の始まりで色々戸惑うことが多いかもしれません。しかし、それと同時に発見も多いはず。自分の住んでいる地域や大学内を散策して、様々な発見をしていって下さい。



大学内を散策していくと、図書館という場所があります。本学の図書館は、単科大学附属図書館の平均蔵書数を大幅に上回る、蔵書数47万冊のとても大きな規模の図書館です。47万冊と数字で言われてもピンとこない人は直接書庫に入って実際に本を見に行ってみて下さい。予想よりも遙かに多数の本に出会えると思います。書庫内の図書は言語別に配架されています。自分の専攻語の図書を直接手に取ってみてはどうでしょうか。きっと更にその言語に対しての興味や関心が湧いてくるのではないかと思います。

書庫の散策が終わった後は、館内も是非散策してみてください。後援会寄贈の資格・就職関係の本や様々な言語の新聞・雑誌。そしてレファレンスや相互貸借サービスといったレポートや卒業論文、課題のときなどに手助けをしてくれるサービスがあります。その他にも、自分の読みたい図書の購入希望を出すことも可能です。図書館にはこれら以外にも様々なサービスがあります。

せっかくある図書館の様々なサービスを利用しないのは損をしていると思いませんか。たくさん図書館を利用して自分なりの図書館利用法を見つけていって下さい。

ドイツ文学わき道散歩(4)

“けれどもこれは別のお話”。今回で第4回を数える本連載でも使っているこのフレーズを読んで、「あれ?」と思う読者の方も多いのではないだろうか。数年前、人気脚本家の書いたTVドラマでも毎回こうして話は締めくくられたが、それは実はあるドイツ文学作品を模している。

M.エンデ作『はてしない物語』は、映画『ネバーエンディング・ストーリー』の原作としてわが国でも認知度の高い作品である。ここ最近のファンタジー小説人気もあって雑誌などに取り上げられることもあるが、映画のイメージのためにドイツ文学だということを知らない人が意外に多い。映画は観たが原作は読んだことがない、という人にこそ是非一読をお勧めしたい理由がある。映画とは全く違う雰囲気には驚くことは間違いない。児童文学と侮るなかれ。子ども向けの作品だと思っている人も、原作を読めばこの話が単純に勇者アトレイユと少年バスチアの冒険物語というわけではないことが解るからである。ユングやフロイトを輩出したドイツ語圏では文学も深層心理を利用したからくり満ち、原作でしか味わうことの出来ない奥行きを持っている。ひとつの物語が別のひとつの物語を生み、その物語が更にもうひとつ物語を生む。人はみな心の中に“ファンタジーエン”を持っていると感じる、想像力を総動員して楽しみたい作品である。

ところで、“ファンタジー”と聞いて連想されるものの中には、古い民間伝承や文学作品の由来となる伝説に多く登場するものがある。聖剣、竜、小びと、そして騎士。ドイツ文学を語る上で必ず通る道にそれらと出会う作品が存在するのだが、けれどもこれは別のお話、いつかまた別の機会に。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり